

C-9 衣服にほどこされたアイヌ紋様とその色彩について (第1報)

東京家政大家政 ○荒井 純子
日本色彩総合研 荒井 倭子

1. 我が国の北方にのみ生存していたというアイヌ民族の衣服は、厚司 チカルカルペカパラミップ ルウンペで彼等民族特有のものであることはいうまでもないが、これ等衣服の形態は我が国の着物とほとんど異ならない。しかし衣服に施されている紋様は彼等特有の大胆且つ当を得たもので雄大壮麗で非常に美しく、図案の形成、配色などは他の民族衣裳には見られない。私共はこの図案の形成・展開と配色について検討してみようと思う。

2. 彼等のこの紋様は魔除け、お守りの意味が強いという説があり、星、かにの爪、つる草などをかたちどったものが多く、脊、肩、衿、袖口、腰、裾にかけて魔物のしのび入るのを防ぐため、守るためにつけたものらしい。模様が魔除けであるということは、彼等の生活様式から考えて充分肯定できることであるが、その紋様の形態は種々である。私共はこの紋様の基本型を分類し、土俗品にあらわれた紋様を分析してみた。

3. 紋様の傾向としては北方系のもの、南方系のものいろいろあるが、彼等らしい大陸的な構造で作られていることはおどろくばかりで、この紋様の傾向で或程度地方差も年代も考えられる。更にこの紋様に現われた色彩は、交易などによって得た衣服の布片を巧みに使いわけて美しく調和させているが、彼等が使用したこれ等の色を分類して見るとある種の傾向が得られる。